

# 予防接種について

《 ヒブ・小児の肺炎球菌 》

## 金沢市の乳幼児期に受ける定期予防接種

(2020年10月1日現在)

乳幼児期の予防接種		受ける時期と接種回数	ワクチン種別
ロタウイルス	ロタリックス	出生6週0日後から24週0日後まで(初回接種については、標準として生後2か月から出生14週6日後まで)に27日以上の間隔をおいて2回経口投与	生ワクチン(経口)
	ロタテック	出生6週0日後から32週0日後まで(初回接種については、標準として生後2か月から出生14週6日後まで)に27日以上の間隔をおいて3回経口投与	
Hib (インフルエンザ菌b型)	初回	<b>【標準的な接種パターン】</b> 生後2か月～7か月の前日までに接種開始の場合 初回: 27日(医師が認める場合は20日)以上(標準として27日～56日)の間隔をあけて3回接種(生後12か月の前日までに完了) 追加: 初回3回終了後、7か月以上(標準として7か月～13か月)あけて1回接種(注)	不活化ワクチン
	追加	<b>【標準的な接種パターン以外の場合】</b> ①生後7か月～1歳の誕生日の前日までに接種開始の場合 初回: 27日(医師が認める場合は20日)以上(標準として27日～56日)の間隔をあけて2回接種(生後12か月の前日までに完了) 追加: 初回2回終了後、7か月以上(標準として7か月～13か月)あけて1回接種(注) ②1歳の誕生日～5歳の誕生日の前日までに接種開始の場合: 1回接種	
小児用肺炎球菌	初回	<b>【標準的な接種パターン】</b> 生後2か月～7か月の前日までに接種開始の場合 初回: 27日以上の間隔をあけて3回接種(生後24か月(標準として生後12か月の前日までに完了) 追加: 初回3回終了後60日以上の間隔をあけて、生後12か月以降に(生後12か月～15か月の前日までを標準的接種期間として)1回接種(注)	不活化ワクチン
	追加	<b>【標準的な接種パターン以外の場合】</b> ①生後7か月～1歳の誕生日の前日までに接種開始の場合 初回: 27日以上の間隔をあけて2回接種(生後24か月(標準として生後12か月の前日までに完了) 追加: 初回2回終了後60日以上の間隔をあけて、生後12か月以降に1回接種(注) ②1歳の誕生日～2歳の誕生日の前日までに接種開始の場合 60日以上の間隔をあけて2回接種 ③2歳の誕生日～5歳の誕生日の前日までに接種開始の場合: 1回接種	
B型肝炎		1歳の誕生日の前日まで(標準として生後2か月～9か月になるまで)に27日以上の間隔をおいて2回接種した後、1回目の接種から139日以上の間隔をおいて1回接種	不活化ワクチン
ジフテリア 百日せき 不活化ポリオ 破傷風 (DPT-IPV)	1期 初回	生後3か月～90か月(7歳6か月)の前日までに 初回: 20日以上(標準として20日～56日)の間隔をあけて3回接種	不活化ワクチン
	1期 追加	追加: 1期初回(3回)終了後、6か月以上(標準として1年～1年半)あけて1回接種	
BCG		1歳の誕生日の前日まで(標準として生後5か月～8か月になるまで)に1回接種	生ワクチン
麻しん 風しん (MR)	1期	生後12か月～24か月(2歳の誕生日の前日)までに1回接種	生ワクチン
	2期	小学校就学前1年間(幼稚園等の年長さん相当の年齢)にある間に1回接種 ※別途個別に通知します。	
水痘		生後12か月～36か月(3歳の誕生日の前日)までに3か月以上(標準として6か月から12か月まで)の間隔をあけて2回接種 ※1回目の標準的な期間は、生後12か月から生後15か月になるまでです。	生ワクチン
日本脳炎	1期 初回	生後36か月(3歳 <sup>※</sup> )～90か月(7歳6か月)の前日までに ※標準的な接種開始時期は3歳です。生後6か月から接種可能です。	不活化ワクチン
	1期 追加	初回: 6日以上(標準として6日～28日)の間隔をあけて2回接種 追加: 1期初回(2回)終了後、6か月以上(標準としておおむね1年)あけて1回接種	

(注)Hibワクチンおよび小児用肺炎球菌ワクチンは、接種開始年齢等によって接種回数異なります。接種回数、間隔などは接種医とよくご相談ください。その他、任意予防接種として、おたふくかぜ、インフルエンザなどがあります。

周知方法

個別通知

接種場所

予防接種協力医療機関

接種時期

通年

### Hibワクチン

インフルエンザ菌は7種類に分類されますが、重症例は主にb型のため、ワクチンとしてもこのb型(乾燥ヘモフィルスb型ワクチン)が使われています。

#### Hibとは?

Hib(インフルエンザ菌b型)は乳幼児の髄膜炎、敗血症、肺炎などの重篤な全身感染症の原因となっています。Hibによる髄膜炎の発症者は、平成22年以前は年間約400人で、約11%が死亡や後遺症を残すなど予後不良と推定されていました。また、生後4か月から1歳までの乳児が過半数を占めていました。現在は、Hibワクチンが普及し、侵襲性Hib感染症はほとんどみられなくなりました。

### Hibワクチンの副反応

接種部位の発赤、はれ、しこりなどの局所反応があります。全身反応として、不機嫌、食欲不振、発熱などがみられます。副反応のほとんどは接種後2日後までに発現して、その後3日以内には消失しています。

アナフィラキシー様症状、けいれん、血小板減少性紫斑病等の重大な副反応が稀にみられることがあります。重い副反応はなくても、機嫌が悪くなったり、はれが目立つときなどは医師にご相談ください。

### 小児用肺炎球菌ワクチン

肺炎球菌による子どもの細菌性髄膜炎などを予防するために、子どもで重い病気を起こしやすい13の血清型のワクチン(13価肺炎球菌結合型ワクチン)が使われています。

#### 肺炎球菌とは?

肺炎球菌は、細菌による子どもの感染症の二大原因のひとつです。この菌は、子どもの多くが鼻の奥に保菌していて、ときに髄膜炎、肺炎、中耳炎といった病気を起こします。肺炎球菌による髄膜炎の発症者は、ワクチン導入前は年間約150人前後と推定されていました。死亡や後遺症を残すなど約21%が予後不良とされています。現在は、肺炎球菌ワクチンが普及し、肺炎球菌性髄膜炎などの侵襲性感染症は激減しました。

### 小児用肺炎球菌ワクチンの副反応

接種部位の局所反応として紅斑、はれなどが認められます。全身的な副反応として、発熱が認められます。

アナフィラキシー様症状、けいれん、血小板減少性紫斑病等の重大な副反応が稀にみられることがあります。重い副反応はなくても、機嫌が悪くなったり、はれが目立つときなどは医師にご相談ください。